

八幡の森

伊藤左千夫

青空文庫

市川の宿も通り越し、これから八幡やわたという所、天竺木綿てんじくもめんの大きな国旗二つを往來の上に交授こうじゆして、その中央に祝凱がいせん旋と大書した更紗さらさの額かかが掛つている、それをくぐると右側の層屋の家では、最早もはやあかりがついて障子がぼんやり赤い、その隣りでは表の障子一枚あけてあるので座敷に釣つてあるランプがキラリと光を放つている、ほのくらい往來には、旅の人でなく、土地のものらしい男や婆さんやがのつそりのつそりあるいている、赤児をおぶつた児供やおぶわないのや、うようよ楨まきべい屏の蔭に遊んでいる、荒物店の前では、荷馬車一台荷車一台と人が二三人居おつて何か荷物を薄暗い家の中へ運はこんでいる、空にも星が一つ見えだした、八幡やわたの森

にも火が点じた　すべて寛ゆるやかな落着いた光景、間もなく鳥居の前へくる。

鳥居が薄白く見える、能よく見ると少し光っている、トタンで包んだ鳥居は西焼けのあかりを受けて、かすかに光るのであった、左へ鳥居を這はい入ると、鳥居についた左手に、屑屋の小さな飲食店がある、前に葦あしすだれ簾のきぐちが立ててあつて中の半分は見えない、今カンテラに火をつけて軒のきぐち口に吊つた所で、油煙ゆえんがぼつぽと立つ　低い茅かやの軒のきへ火がつきやしないかと思われる、卵たまごや煮肴にざかなやいろいろの食物が、各大小相当の皿に盛られて雑然並べてある、それでも中央の前の柱のカンテラの下には、掛かけ花生はないけに菊の花がさしてある、婆さんらしいのが表へ尻を向けて仕事をしている。家の中

ではランプが今一張ひとはりついた、これが八幡神社やわたの入口である。

二人は社に向つてゆく、空は未だ全く暗くなつてはしまわぬ、右手の農家の前では筒袖をきて手拭を冠かぶつた男が藁しべなどを掃いている、左手の何か大きい四角の石で女らしいのが頻りに藁しきを打つて居る、夜なべに縄をなうか、草履ぞうりでもつくるのであろう。

それから先は両側の松林が幹を差替さしかわす許ばかりに遠くつづいて石畳の路を掩おおうている、奥にはほんのり暗くて何のあるのも判らない、ただ敷石の道が白く長く帯を延のびした様に奥深く通じて居るのが見える許ばかりである、予等二人が十五六間けんも進んで這入はいつてゆくと漸ようやく前面にぼんやり萱茸かやぶきの門が見えだした。

先年桃林の花を見に来た時この此門前に一人の婆さんが茶を売つて居お

つたことを思い出す、ちかづ近いて見れば無論婆さんは居ない、茶店のあつたらしい所には石が三つ四つ並んで居る、見たところ今でもあの婆さんが出るのかどうかは知らないが、兎とに角日中かくは茶店がある様子だ、左右の矢大臣もそれと許ばかりほのかにおもかげ俤が見える、門を這はい入る、木の葉が石の上にひたに散つてあるのが下駄にさわる、がさがさする音が耳立って聞える 二人は無言で進む しずか静なこと はこおろぎも鳴かぬ。

正面に社殿が黒くぼつと見えて来た、前に張られた七五三飾かざりが、繩は見えないで、御幣ごへいの紙だけ白く並んで下さがつて居るのが見える、社殿の後は木立が低いので空があらわれた、左右の松木立の隙間にあらわれた空の色が面白い、薄い茶色に少しく紫を含んだ、極

めて感じのよい色である、油絵にもこういう色は未だ見ない、西洋の写真にこういう色を見ることがある、西焼のあかりが未だ空全体に映っているのであろう、松林にまじっている冬木が幾分の落葉を残してほのりとした梢の趣がその空の色と調和がよい、油絵が出来たらなアと思う、空の色がよいなと思った眼を稍下へ見下げると、社殿の右手の木立が西あかりを受けてかあたりが一体にあかるい、そのあかるいのに何となし光がある様に思われる、不折君の所謂いわゆる絵具の光ということなど思いたす、あたり一面に色ある落葉が散っている、がさがさ落葉を踏みちらして進む、拝殿の柱に張った七五三と思つたは、社殿二間けんほど前に両側にある松に張つてあるのであつた、松の根にある唐獅子はただ黒

ずんで見える許りばか目も鼻も判らぬ、台石に点々色がある、落葉かと思つて眼を寄せて見れば黒ボクの石の隅々をついだシツクイであつた、二人社前に正立し帽を脱て黙拜した後右手へ廻まわる。

先に西あかりを受けた木立の色と思つたは、非常に大きい銀杏である、丈はそれ程でないが、幾百本とも判らぬ幹が総立に一纏まとまりになつているから、全周囲は二三丈じょうもあるであろう、思えば先年参詣の時門前の婆さんが千本銀杏と申しますと云われたのであつた、落葉は未だいま三分の一にも達しない、光る許ばかりの黄葉もみじを薄暗い空気でつつんだ趣き、あかるいようでも物の判らぬ夢のような感じだ、いやどうしても適當の形容語が出来ない、その銀杏の蔭に立つて居ると、黄色い空気の中に這入はいつて居る感じで、そうして、

それが薄暗い夜の感じで何とも云えないよい感じである、ステツキで枝を打つとばらばら葉が落ちる、非常に静しずかであるから帽子に落つる音が聞える、その音が夢で聞くような感じのする音である、暫しばらく遊んでいて見たかったが、時刻が時刻故ゆえそうもいかないで裏を一週して、西手の白壁がある板倉の脇へ出る、社に板倉は不調和の感じがした。

二人は帰る方向になって西を向くと、西焼けの残光が未いまだ消え切らないで、木々の隙間から地平線に明るい、今まで暗いと思つた松林の根もとがはつきりと見えた、神楽堂の上には背の高くくねつた松が空に自分の影を摸様の如くに押し居るのが一寸ちよつと面白い、直ぐに出て了しまうのは如何いかにも惜しいような気がして、屢しばしば々々

銀杏を振返り、あたりの趣を眺めつつ、偶然の思いつきで、趣味深い時刻に来た仕合しあわせを語り合いつつ出る。

しらずやわたのもり

不知八幡森も予は幾度か見て居るが、つれの人は始めてである

ちよつと

から、一寸立寄つたけれど、もう暗くなって石牌の文字も判らない、森というは名許なかりで今は全く竹藪に変わっている、竹藪の中は闇々として暗いばかり空は青ぎるばかりに澄んで、そよとも動かぬ大竹藪の上には二三十の星ひややかが冷に光って居た。

明治39年1月『馬酔木』

署名

左千夫

青空文庫情報

底本：「左千夫全集 第二卷」岩波書店

1976（昭和51）年11月25日発行

底本の親本：「馬酔木 第三卷第一號」根岸短歌会

1906（明治39）年1月1日

初出：「馬酔木 第三卷第一號」根岸短歌会

1906（明治39）年1月1日

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

「其」は「その」に、「只」は「ただ」に、置き換えました。

※読みにくい言葉、読み誤りやすい言葉には、振り仮名を付しました。底本は振り仮名が付されていません。

※「許」と「許り」と「ばかり」の混在は、底本通りです。

※初出時の署名は「左千夫」です。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

八幡の森

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>